

第1回福井県高等学校教育問題協議会 主な意見の抜粋

令和元年10月25日(金)

国際交流会館 14:00~

○石井委員

- ・福井県の高校における1クラス当たりの人数の状況がわかる資料を次回でもいいので見たい。
- ・1クラス当たりの望ましい人数を考える際に、教員の質と数の問題がある。今回の諮問の魅力化についてもその議論は非常に重要。
- ・発達障害など特別なニーズのある高校生への対応としても、教員の質と数の確保は重要。

○市橋委員

- ・産業界と学校が連携して福井の魅力を小さいうちから教えるなど、進学で出て行くのは防ぎきれないと思うが、就職に関しては、できるだけ地元にとどめるよう対策をしてもらいたい。住みたい県ナンバーワンというところで、福井の魅力を発信していく取組みがもっとできればよいのではないかと。

○稲山委員

- ・職業教育、産業教育は非常に大事だが、母数が少ないので、高校新卒の地元の中小企業への就職というのは本当に難しくなっているのが実態。私のところには継続して毎年、少ない人数、1名、2名でも入れていただくというのが希望だが、現実はそうならない。

○宇佐美委員

- ・福井県はきちんと高校を配置していただいているが、どうしてもJRと8号線を中心に高校等を配置し、遠い西側、山側は自分の交通事情によって学校を選択せざるを得ない状況。学校再編で高校がなくなる、あるいは小さくなっていくということになると、子ども達の進学先の選択肢が減っていくという点も、魅力づくりとは別の観点として考えてもらいたい。
- ・例えばスポーツに進む子どもは、推薦で入るだけでなく、体育の先生になりたいという子どももいる。英語で海外に行きたいあるいは、起業・経営をする高校生も増えている。国際科やITなど、少人数でも秀でた子どもたちを引き立てるような学科を作ってほしい。
- ・県立の先生方は忙しくて教えるだけで精一杯になっていると思う。それをサポートする他の先生やスタッフを配置するなど、人員配置を考えていただくということが県立の魅力アップの一つではないかと。
- ・博識のある方からのご意見だけでなく、魅力を感じないと行かない子どもたちや保護者からも意見を聞いてもらえたらと思う。

○萩原委員

- ・1クラス当たりの人数が職業科系は少なく、普通科系が多い根拠は何か。
- ・普通科系でも細かく手をかけるべき生徒もいる。1クラスあたりの適正規模を考えるべき。
- ・生徒数の14年後の減少が現実問題として存在している。魅力上げるのも大切だが、この生徒数に対してどう考えるのかしっかり議論をすべき。魅力上げてても生徒がいなければ、魅力をいくら上げても無駄ということになる。
- ・毎日学校に通わなくても大丈夫な術が出ている。これも考慮して魅力化を図る必要。

○吉川奈委員

- ・教育の目的として、地元に着する人材を育成しようというのが本当にいいのか。地元に着するは、大人

にとっては魅力的だが、子どもにとってはどうなのか。ちょっと大人目線過ぎないか。

- ・福井で教育を受けて、一旦はいろんな所で仕事をして、また戻ってこよと思える魅力的な福井であるためには、福井の特色あるものを学校教育で目指していくべきではないか。

○草桶委員

- ・地域の課題解決など探究的な学びを通じて、自分が住んでいるところは良いところだと、また戻ってきたいと思い、県外の大学に進学して戻ってくるという卒業生を数多く見てきた。この高問協では、数の議論も大切だが、高校の魅力を高めることについて議論すべき。

○小和田委員

- ・地域の文化を育て地域を活性化するためには、その地域にある高校の存在が非常に大きい。地域の人たちと、どんなことを話し合い、かつ学んだか。その経験が大学に進学した後、また就職した後、地域に戻ってくる一つのきっかけになると考える。
- ・探究的な学習などの授業展開では、ある程度の空間が必要。建物があって子どもが減っていくのは大変ではあるが、その使い方によってはまだまだ学校の魅力化に役立つ。

○津田委員

- ・2クラスで経営が成り立っていて、子どもたちがそこで学べるというのは、とっても嬉しいことなのではないかと思う。少人数でも経営できる学校になってほしい。
- ・頑張れる子どもには先頭を切って頑張ってもらうことも大切だが、そうではない子どものことも含めて全体のことも考えてほしい。そのためにも先生方が全ての子どもたちにもう少し寄り添えるだけの時間をあげてほしい。もう少し先生の数を増やしてほしい。

○徳本委員

- ・無償化になると県立と私立は何が違うのだということになる。私立も一緒になって議論するような場にしていなければならぬのではないか。
- ・子供達の後ろにいる60代70代の元気なおじいさん、おばあさん方をこの議論のどこかに入れていかないと、上の方の将来ビジョンだけではバランスが悪いような気がする。

○吉川雄委員

- ・1クラスの人数をどの程度に持つのが一番いいのか考える必要がある。
- ・小中でのアクティブラーニング的なことが、どこまで高校普通科でできるか。それはどれくらいの人数なら可能なのか、どこまでなら絞れるのか。そういったことも今後議論すべき。
- ・学校再編は、一駅行けば他の学校に通えるような交通インフラが整備されている都市ならばできる。大野とか勝山で減らした場合、そこに行く交通をどこまで担保できるのか。
- ・ふるさと教育を高校でもやっていかないと、地域に魅力が無いということで出て行ってしまう。再編したところで、再編、また再編という悪循環が繰り返されてしまう。
- ・地元で高校があるのは、小中学校の人間にとって安心。当然、地元にある高校に一番行きたい。資料を見ても、地元の高校に行く傾向にあるのが分かる。残していくべき。
- ・子どもにとって、どういう教育をすべきなのか、地域にとってどういった形で高校を存続させるべきなのか。ビジョンが必要。

※掲載は50音順となっています